

## 5

## ヒートパイプを利用したコンクリートのクーリング方法の開発と実用化

伊吹 真一\*1・柳 博文\*2

## 概 要

マスコンクリートのひび割れ抑制対策として、断面内に熱移動量の大きなヒートパイプを設置し、コンクリートの水和熱による温度上昇を抑制する方法を開発した。ヒートパイプは作動液の気化により熱移動が発生するメカニズムであり、一般的なコンクリートの温度応力解析への適用には解析用の熱伝導率を設定することが必要となる。

そこで、実構造物での計測および模型実験を通して、ヒートパイプを利用したパイプクーリングによるコンクリートの温度低下量を測定し、解析用物性値の提案とそれを用いた解析により、ひび割れ抑制効果の検証を実施した。

キーワード：マスコンクリート，ヒートパイプ，パイプクーリング，温度応力解析

DEVELOPMENT AND PRACTICAL APPLICATION OF THE CONCRETE COOLING METHOD  
USING HEAT PIPES

Shinichi IBUKI \*1, Hirofumi YANAGI \*2

## Abstract

As a means to control cracking of mass concrete, we have developed a method of controlling temperature rises in the concrete, caused by the hydration heat of concrete, through an arrangement of heat pipes with a large heat transmission capacity which are laid in a section of the concrete. The arrangement of heat pipes is a mechanism to facilitate heat transmission through vaporization of a working fluid. Therefore, it is necessary to set a heat transmission factor which is designed for thermal stress analysis of general concrete. Keeping this need in mind, we measured an actual structure and a mock-up test, where the drop in concrete temperature was measured by pipe cooling to propose an analytic physical value. We validated the crack control effect by using physical properties.

Keywords: mass concrete, heat pipe, pipe cooling, thermal stress analysis

---

\*1 Foundation / Structure Research and Development Group, Engineering Department, Civil Engineering Division

\*2 Manager, Foundation / Structure Research and Development Group, Engineering Department, Civil Engineering Division

## ヒートパイプを利用したコンクリートのクーリング方法の開発と実用化

伊吹 真一\*1・柳 博文\*2

### 1. はじめに

近年の技術提案型発注工事は、品質向上や耐久性向上をキーワードとしたコンクリートの初期欠陥を減少させる技術が求められている。特にマスコンクリートでは、セメントの水和発熱によるひび割れがテーマとなるケースが増えている。

従来より橋脚等のマスコンクリート対策として、コンクリート内にパイプを設置し、冷却水を循環させるパイプクーリングが実施されてきた。しかし、この場合、冷却水のプラント設置が必要であり、コストの高さが課題となっていた。そこで、熱移動量の大きなヒートパイプを用い、コンクリートの水和熱による温度上昇を抑制する簡易な方法を開発した。

ヒートパイプを利用したパイプクーリングは、熱移動量の大きい棒状ヒートパイプをマスコンクリート内に設置し、高温になる内部熱をヒートパイプにより移動させ、外部に熱を放出させる工法である。本工法は、冷却水の循環が無い簡便なパイプクーリングで、冷却水の循環管理・温度調整を行う装置が不要になり、大量の水の調達が困難な作業現場においても、必要な部位のみの温度を制御することができる。

通常、パイプクーリングなどのマスコンクリートのひび割れ抑制対策を実施する場合は、事前に温度応力解析を実施する。解析を行う場合、マスコンクリートのひび割れ制御指針<sup>1)</sup>を用いるのが現状であり、一般に普及しているプログラムを含め、有限要素法[FEM]による熱伝導計算を基本としている。したがって、パイプ内の蒸気流の移動を利用したヒートパイプを一般のプログラムに適用するためには、クーリングを

構成する各要素について、解析のための見かけ上の熱伝導率の設定が必要となる。

### 2. ヒートパイプを利用したパイプクーリング

#### 2.1 ヒートパイプ

ヒートパイプ<sup>2)</sup>はパイプ内に冷却媒体となる少量の作動液が真空状態で密封されており、迅速な熱移動を可能としている。熱移動のスピードは銅棒の数十～数百倍の熱伝導率に相当し、その原理は路面融雪や電子機器の冷却などに広く利用されている。

ヒートパイプの動作原理を図-1に示す。ヒートパイプの一方を加熱すると、作動液は蒸発し(潜熱吸収)、蒸気流は音速に近いスピードで低温部に移動する。低温部では蒸気が凝縮して液体となり熱を放出する(潜熱放出)。

パイプの内部にはウィック(芯)が配置されており、ウィックの毛細管力や重力を利用して低温部の液体を高温部に還流する構造となっている。低温部の液体が高温部に還流することにより、作動液の熱の吸収と放出が連続して起こり、熱の移動が継続する。

パイプの材質と作動液の種類のリ組み合わせに

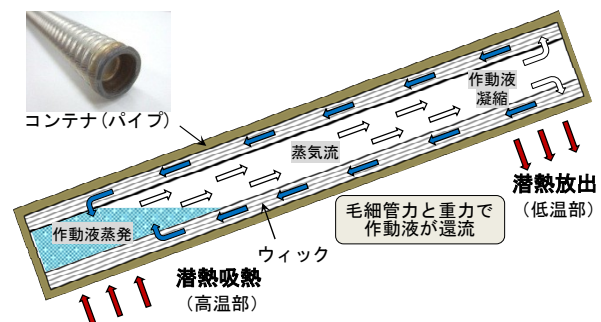


図-1 ヒートパイプの原理

\*1 土木本部 エンジニアリング部 基礎・構造グループ

\*2 土木本部 エンジニアリング部 基礎・構造グループ グループリーダー

は、適用温度に応じて種類があるが、本工法ではコンクリートの打設後の温度上昇量を考慮した温度範囲と扱いやすさを考慮して、ステンレス製のコルゲートパイプ（外径27mm）をコンテナとし、作動液にはエアコン等にも使われている冷媒R134 aを用いたヒートパイプを使用した。

## 2. 2 施工概要

パイプクーリングは一般に重力式コンクリートダムに適用されることが多いが、近年は鉛直に配置したシース管に冷却水を循環させる方法で橋脚やボックスカルバート<sup>3)</sup>に適用される事例が増加している。

ヒートパイプを利用したパイプクーリングは、コンクリート打込み後 4～6 時間後のコンクリートが硬化し始めた時点で、**図-2**に示すように、あらかじめ 50～75cm 間隔に埋設した直径 50mm 程度の鋼製シース管にヒートパイプを挿入し、その後に水を注入する。コンクリート内部の熱は、鋼製シースおよび水を介してヒートパイプに熱伝達され、空気中に放出される。

また、ヒートパイプの空気中に突出した部分を扇風機等で送風することにより、放熱を促進してヒートパイプの熱移動作用を増強すると、コンクリートのクーリング効果が高くなる。

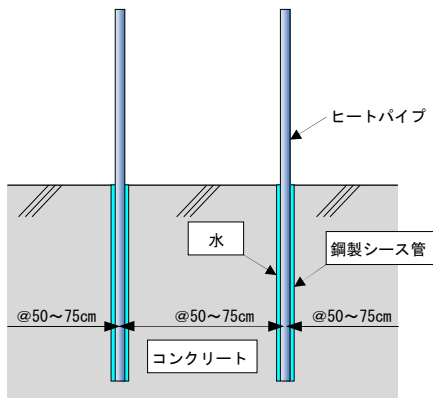


図-2 ヒートパイプを利用したパイプクーリングの概念図

## 2. 3 工法の特徴

従来のパイプクーリングでは大量の水と冷却装置等のプラント設備が必要であるが、本工法

はプラントが不要であるため低コストとなる。また、従来工法では、循環に必要な大量の水の確保、および排水方法が問題となり、施工できる現場が限られていた。本工法は大量の水の調達が困難な現場や小規模な工事においても適用が可能である。

ヒートパイプは繰返しの使用が可能であるため、RC 橋脚等の多ロットのコンクリート打込みのある現場ではコスト低減効果を得やすい。また、施工中は水温の調整等の管理が不要であるため、施工の省力化も図れる。

## 3. ヒートパイプの適用性の確認

コンクリートの水和熱による温度上昇を、ヒートパイプによりクーリングすることの適用性について、模型試験体を製作し確認試験を行った。

確認試験は、ヒートパイプの有無により、コンクリート試験体の水和熱による温度上昇の違いを計測してヒートパイプのクーリングに関する適用性を確認した。

### 3. 1 模型試験体および計測概要

模型試験体はクーリング無し（試験体 No.1）とクーリング有り（試験体 No.2）の 2 体とし比較検討を行った。ヒートパイプによるクーリングを行った試験体 No.2 の形状寸法を**図-3**に示す。試験体寸法は 1m×1m×高さ 1.5m とし、側面および底面は型枠+断熱材としたマスコン

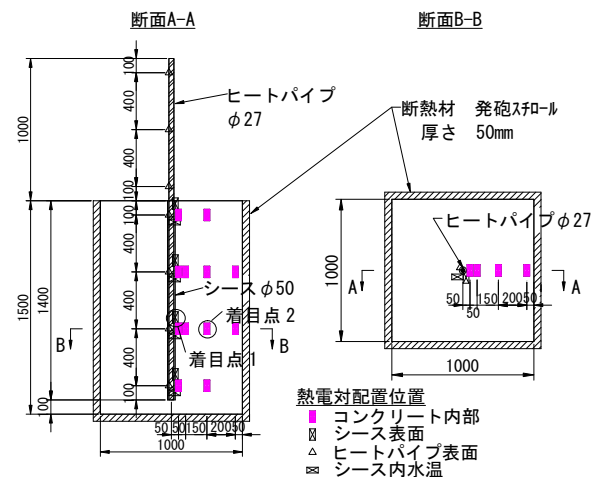


図-3 試験体形状図(試験体 No. 2)

クリートを模擬したものである。断熱材は発泡スチロール（厚さ 50mm）で、型枠の内側に設置した。橋脚等の一般的なコンクリート構造物を想定し、コンクリート温度が最大 70℃程度となるよう表-1 の配合とした。

表-1 配合表

セメント種類	粗骨材の最大寸法 (mm)	水セメント比 (%)	細骨材率 (%)	単位量 (kg/m <sup>3</sup> )				
				水 W	セメント C	細骨材 S	粗骨材 G	AE 減水剤
N	20	44.2	42.4	190	430	689	963	4.3

コンクリート打込み後、鋼製シース管にヒートパイプを挿入した。計測は、熱電対を用いてコンクリート内部・ヒートパイプ表面・シース表面の温度およびシース内の水温を測定した。なお、室内で試験を行い外気温は 20℃一定となるように空調を行った。

### 3.2 実験結果

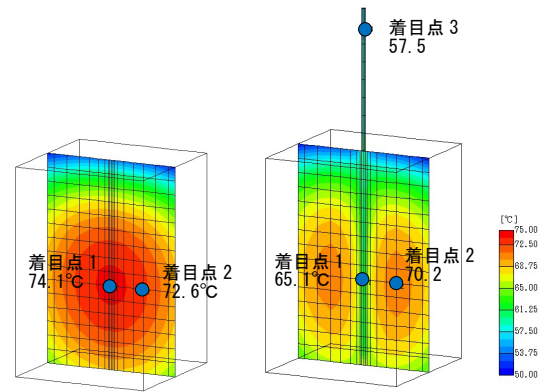
試験体に配置された熱電対により計測された温度から求めた断面Aの最高温度分布図を図-4 に示す。クーリングの有無で試験体の最高温度分布を比較すると、ヒートパイプの周囲の温度の低下が確認できる。試験体中心部の着目点1のコンクリート温度を比較すると、試験体No.1が74.1℃であるのに対し、試験体No.2のヒートパイプ周囲の温度は65.1℃であった。試験体No.2でコンクリート温度が最大となる着目点2の温度履歴を試験体No.1の温度履歴とともに図-5 に示す。着目点2では最高温度時にクーリングにより2.4℃の温度差が確認できた。その後も温度差が拡大しており、ヒートパイプは、クーリングの実施期間中作動し続け、放熱が持続してコンクリート温度の上昇を抑制できることが確認できた。

最高温度時のヒートパイプの表面温度の分布を図-6 に示す。ヒートパイプの表面の温度は、シース内の水の対流の影響で位置によらず概ね一定の温度であった。また、気中部はパイプ中間部より先端部の温度が高くなっている。これは、放熱区間のなかでもより先端部で作動液の

蒸気が凝集し潜熱放出を行うためと考えられる。

また、図-7 に示す断面Bの最高温度分布では、ヒートパイプ表面とシース表面の温度の差は3.1℃であり、コンクリートからヒートパイプ表面まで連続的な温度低下がみられ、シース内の水が熱移動の障害となっていないことがわかる。

これらの試験結果より、コンクリートの温度上昇の抑制にヒートパイプが有効であることが確認できた。



試験体 No.1 クーリング無し 試験体 No.2 クーリング有り

図-4 最高温度分布図(断面A)

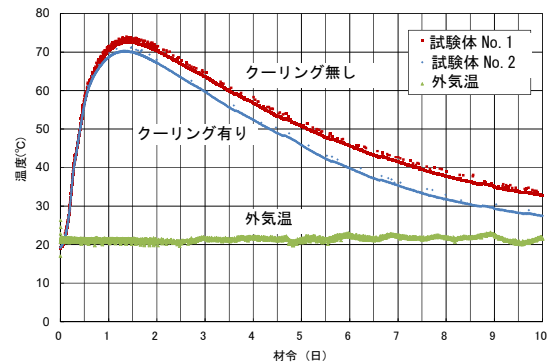


図-5 温度履歴の比較(着目点2)

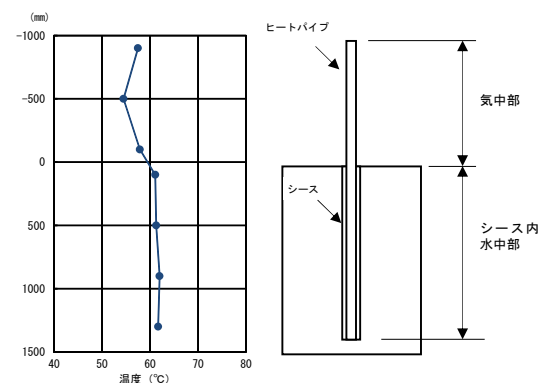


図-6 最高温度時のヒートパイプ表面の温度分布

### 3.3 解析用物性値の設定

ヒートパイプを利用したパイプクーリングを温度解析に適用する場合、ヒートパイプの熱移動特性およびシース内の水の熱伝導特性を考慮する必要がある。そこで、一般的な温度応力解析用プログラムでヒートパイプの冷却効果を評価するために、ヒートパイプおよびシース管内の水の見かけの熱伝導率を試験結果から逆解析して算定した。すなわち、模型試験体で得られた計測温度結果を用いて、試験体No.1を基準とし、試験体No.2との温度差をヒートパイプによるクーリングの影響としてヒートパイプに関する解析用の物性値を求めた。

温度解析モデルを図-8に示す。モデル上のヒートパイプおよびシース内の水については、固体要素として見かけの熱伝導率を与えて評価することとした。解析に用いた熱物性値および境界条件を表-2に示す。なお、計測結果で求められなかった物性値については、指針<sup>1)</sup>に示されている一般的な値を用いた。先述した図-7の最高温度分布図では、フィッティングで特に着目した断面Bの実測値と解析結果を併せて示している。

ヒートパイプの見かけの熱伝導率は40000W/mKとし、密度および比熱については銅と同じとした。これは、ヒートパイプの要素モデルとして銅の約100倍の熱伝導特性を持つ要素として評価したものである。ヒートパイプの熱移動特性は、温度条件や長さなどにより変化する<sup>2)</sup>が、ここでは一定値として設定した。

シース内の水の見かけの熱伝導率については、シース表面・シース内の水・ヒートパイプ表面の実測値の温度勾配に着目して解析値を求めた。その結果、見かけの水の熱伝導率は1.8W/mKとなり、水の一般的な熱伝導率の3倍の値となった。これは、水の対流の影響と金属シースの影響を含んだ値と考えられる。

ヒートパイプの気中放熱部の表面熱伝達率は20W/m<sup>2</sup>Kであり、一般的なメタルフォームの熱伝達率<sup>3)</sup>より大きい結果となった。今回使用し

ているヒートパイプのコンテナはステンレス製のコルゲート管であるため表面積が大きいことによる影響と考えられる。

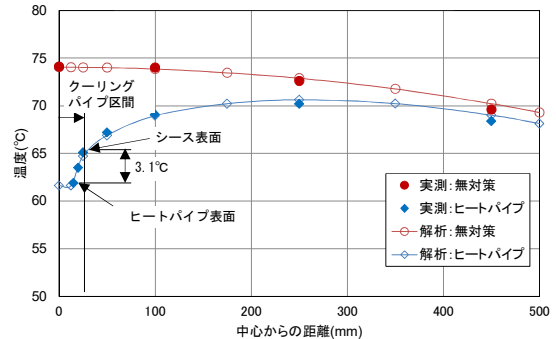


図-7 最高温度時温度分布(断面B)

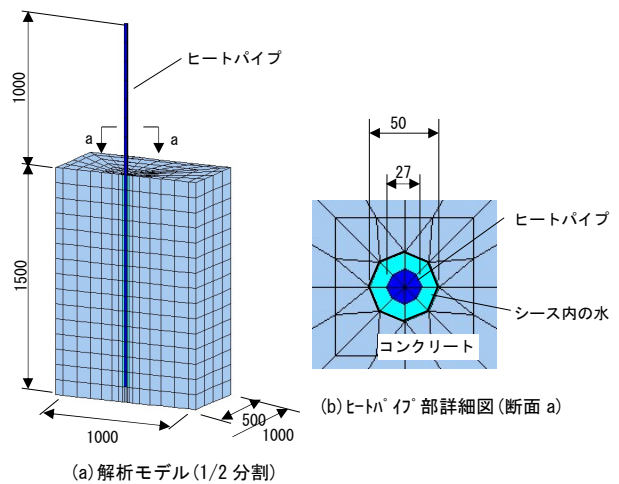


図-8 温度解析モデル

表-2 解析に用いた物性値

項目	物性値		備考
コンクリート	熱伝導率	2.7 W/mK	
	密度	2400 kg/m <sup>3</sup>	
	比熱	1.15 J/g°C	
	断熱温度特性	$Q(t)=Q_{\infty}(1-e^{-\gamma t})$ $Q_{\infty}=68.6, \gamma=1.67$	計測より近似
	打込み温度	18.0 °C	実績より
ヒートパイプ	型枠+断熱材	1.5 W/m <sup>2</sup> °C	計測・逆解析より
	見かけの熱伝導率	40000 W/mK	銅の約100倍
	密度	8940 kg/m <sup>3</sup>	銅と同じ
	比熱	0.38 J/g°C	銅と同じ
	表面熱伝達率	20 W/m <sup>2</sup> K	計測・逆解析より
シース内の水	表面熱伝達率 扇風機による送風	70 W/m <sup>2</sup> K	計測・逆解析より 風速 5m/s 程度
	見かけの熱伝導率	1.8 W/mK	計測・逆解析より
	密度	1000 kg/m <sup>3</sup>	
環境	比熱	4.2 J/g°C	
	外気温	20°C	

### 3. 4 送風による放熱効果向上

コンクリート打設後 4 日過ぎより、試験体 No.2 のヒートパイプの表面露出部に扇風機を用いて送風を行い、放熱の促進を行った。扇風機の風速は約 5m/s であった。

断面 B に配置された熱電対が計測した温度変化を図-9 に示す。扇風機の送風によりヒートパイプ表面温度は 10℃程度減少した。それに伴い、シース内の水温および周囲のコンクリート温度も低下していることが確認できた。これは、ヒートパイプの表面露出部の放熱を促進させたことで、コンクリート内部の吸熱も促進されクーリング効果が高まったためと考えられる。

気中部の表面熱伝達率について、表-2 の物性値を用いた解析モデルをもとに、同様の逆解析を実施したところ、今回の条件におけるヒートパイプの表面熱伝達率はおおよそ 70W/m<sup>2</sup>K という数値を得た。

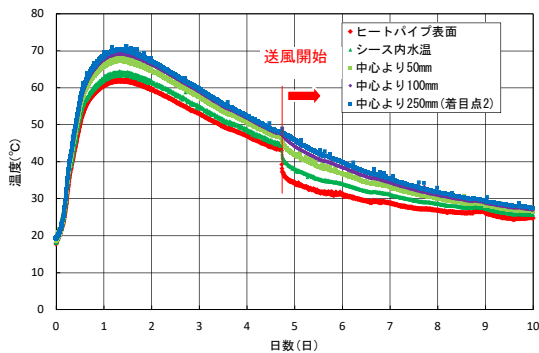


図-9 送風による温度変化 (断面 B)

### 3. 5 ミストによる放熱効果の向上

ミストファンを用いたヒートパイプの放熱促進効果について、模型試験体を作成して比較検討を行った。試験体寸法は 1m×1m×高さ 1.1m とし、断熱型枠としたものである。

ミストファンは写真-1 に示す 10m<sup>3</sup> 水槽からポンプを用いて給水するもので、満水状態から約 1 日程度連続運転が可能であった。水温は 15~20℃程度であり、ヒートパイプ表面は常に水滴が付いている状態であった。試験体に配置された熱電対により計測された温度から求めた

最高温度分布図を図-10 に示す。ヒートパイプの表面温度は 8.4℃低下し、着目点 2 において 3.5℃のクーリング効果の向上がみられた。

本計測結果を用いて、ミストファンによる放熱促進を行っているヒートパイプの表面熱伝達率の逆解析を行ったところ、今回の条件における表面熱伝達率はおおよそ 100000 W/m<sup>2</sup>K という数値が得られた。



写真-1 送風による温度変化 (断面 B)

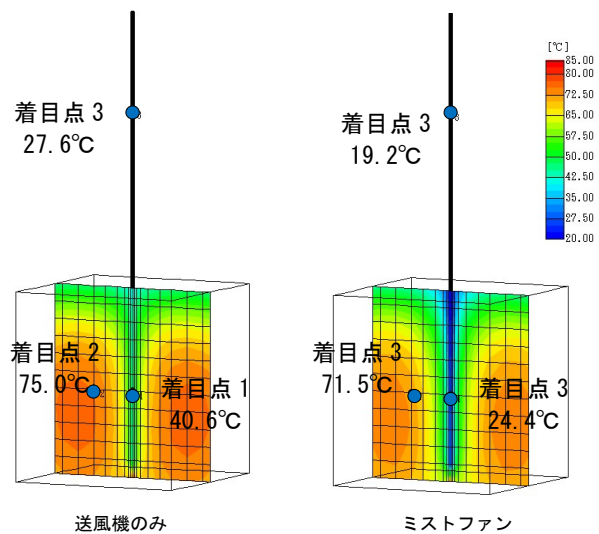


図-10 最高温度分布図(中央断面)

## 4. 実構造物での温度計測およびクーリング効果の検証

### 4. 1 概要

計測対象構造物は、国土交通省中国地方整備局「東広島・呉道路馬木高架橋 PC 上部工事」に含まれる 4 径間 PC ラーメン高架橋の端部横桁である。端部横桁は 2.5m×1.95m×5.4m の

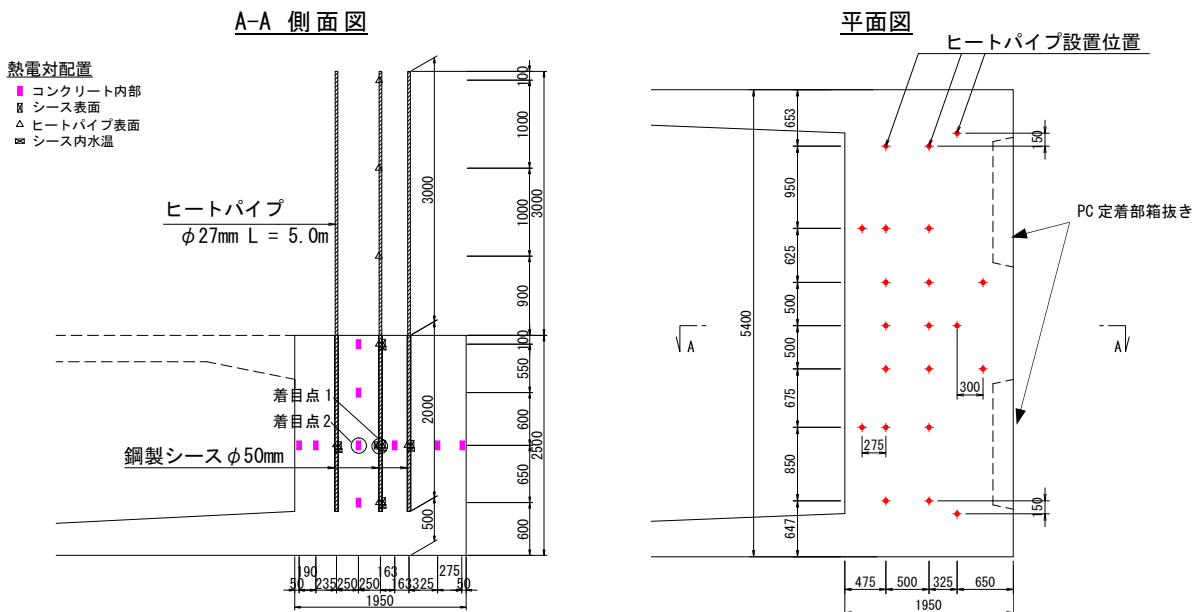


図-11 端部横桁ヒートパイプ・温度計測配置図

マッシブな構造であり、コンクリートも早強セメントを用いているため、横桁中心部の温度が100℃近くになる部位である。そのため、コンクリート内部と外部の温度差による表面ひび割れの発生が予想されていた。ヒートパイプを利用したパイプクーリングは、マッシブな端部横桁において温度上昇を抑制し、ひび割れ発生を抑制することを目的として行った。

4.2 計測概要

計測対象横桁の寸法形状およびヒートパイプの配置を図-11に示す。ヒートパイプの設置位置は、500mmピッチを基本とし、PC鋼材・鉄筋に干渉しないように決定した。

対象がPC構造物であり設計基準強度が40N/mm<sup>2</sup>で、予想される水和熱による温度上昇量が高い。そのため、ヒートパイプの長さは5mとし、コンクリート内部に2m埋込み、気中の放熱区間を3mとし、放熱面積を確保してヒートパイプの効率拡大を図った。また、ヒートパイプの放熱部に送風機による送風冷却も同時に実施した(写真-2)。ヒートパイプによるクーリングは、コンクリート打設後4時間後から3日間実施した。

ここで、比較対象となるクーリングを行わない「無対策ケース」がないため、温度解析によ



写真-2 ヒートパイプを利用したパイプクーリング状況

り無対策のケースを求め、ヒートパイプを利用したクーリングの効果を確認することとした。

クーリングを行う端部横桁に熱電対を用い、コンクリート内部・ヒートパイプ表面・シース表面の温度、シース内の水温および外気温の計測を実施した。熱電対の配置は、図-11に示すように、コンクリート打ち込み高さの中間で、横桁の中央断面(断面A)に配置した。

4.3 温度計測結果と解析値との比較

ヒートパイプを利用したクーリングを実施した端部横桁について、熱電対による計測結果と模型試験で得られたヒートパイプの熱物性値を用いた温度解析結果の比較を行った。解析は、

コンクリートの発熱特性、熱的性質および強度特性はマスコンクリートのひび割れ制御指針<sup>1)</sup>に基づき、実測された外気温に対して行った。コンクリートの配合表を表-3に示す。

表-3 配合表

セメント種類	粗骨材の最大寸法 (mm)	水セメント比 (%)	細骨材率 (%)	単位量 (kg/m <sup>3</sup> )				
				水 W	セメント C	細骨材 S	粗骨材 G	高性能 AE 減水剤
H	20	38	42.1	170	447	717	996	4.92

中央断面において最も高いコンクリート温度が測定された着目点2における無対策（解析結果）と実測値の最高温度の比較を表-4に示す。また、温度解析で得られた最高温度分布図を図-12に、着目点2の温度履歴を図-13に示す。

表-4 着目点2における最高温度の比較

	着目点1 横桁中心	着目点2 コンクリート内部
無対策 解析 (A)	101.4	100.0
クーリング実施 実測 (B)	57.1	86.6
クーリング効果 (B)-(A)	—	-13.4

単位：℃

ヒートパイプを設置した実測値と無対策の解析結果を比較すると、コンクリート内部の着目点2の低下量は13.4℃であった。ヒートパイプを利用したクーリングを行うことにより、端部横桁の水和熱による温度上昇が抑制されていることが確認できた。

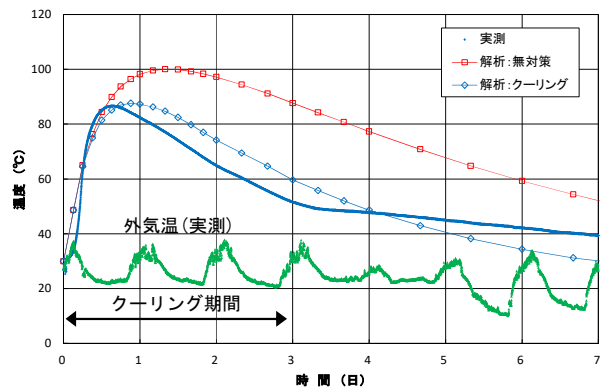


図-13 温度履歴の比較(着目点2)

図-14に中央断面(断面A)の最高温度の実測値とそれに対応する温度解析結果を比較して示す。ヒートパイプを使用した場合の温度解析結果と熱電対による実測値は概ね一致しており、

無対策

クーリング実施

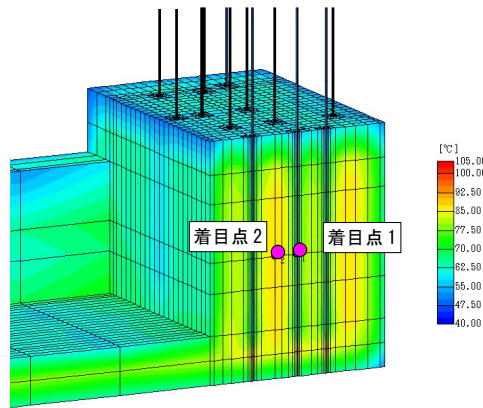
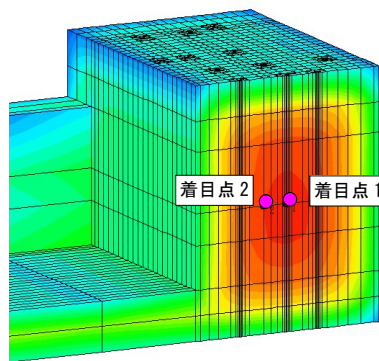


図-12 最高温度分布図

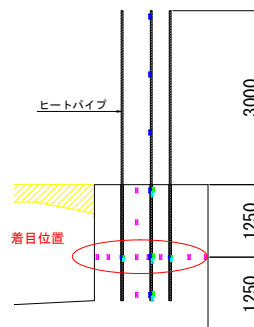
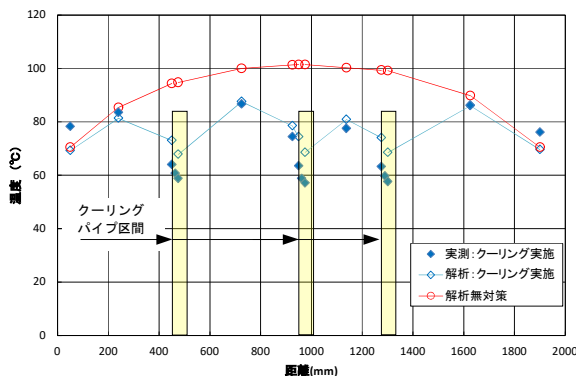


図-14 最高温度分布の比較(断面A)



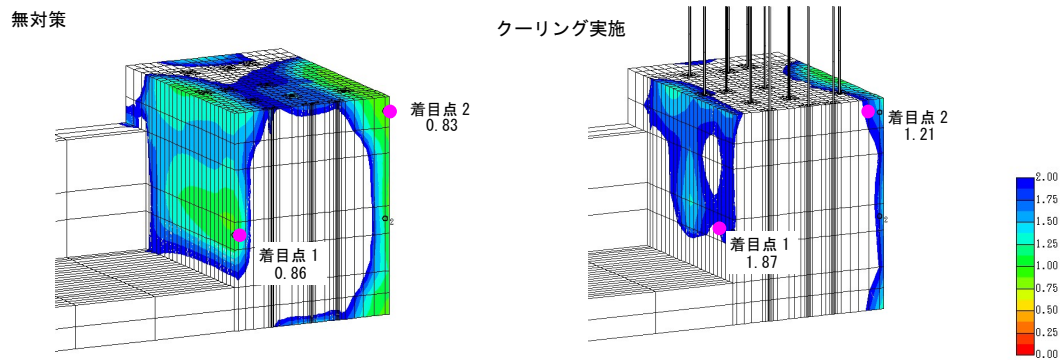


図-15 最小温度ひび割れ指数の分布

今回採用した温度解析の手法は妥当と考えられる。ただし、今回の解析用物性値は少ない測定結果より求めているため、今後はさまざまな環境条件に対応できるように検証を行っていききたい。

#### 4.4 ヒートパイプによるクーリングの効果

解析結果として、最小温度ひび割れ指数の分布を図-15に示す。図をみると、ヒートパイプを設置していない無対策の場合は、表面の大部分で指数が1.0を下回っている。一方、ヒートパイプを設置した場合は指数が大きくなり、指数が小さくなりやすい隅角部の着目点2でもひび割れ指数は1.21となる。また、ひび割れ発生確率が5%以下とされる1.81を上回る部分も拡大している。これらの結果から、ヒートパイプを利用したパイプクーリングにひび割れ抑制効果のあることが確認できた。

#### 5. まとめ

コンクリートの温度上昇抑制のためのヒートパイプの適用について検討した。

検討の結果、以下の知見を得た。

- (1) ヒートパイプを利用したパイプクーリングは、コンクリートの水和熱による温度上昇量の低減が可能であり、ひび割れ抑制対策として有効な手段である。
- (2) ヒートパイプによるパイプクーリングの温度解析は、ヒートパイプの熱移動のメカニズムやシース内の水の対流といった要素を見

かけの熱伝導率に置き換えることで簡易的に解析できる。

- (3) ヒートパイプの表面露出部に送風を行うことで放熱を促進させ、クーリング効果を向上させることができる。

今後は、放熱促進方法を改良することにより、より高いクーリング効果が期待できると考えられ、その検証を行っていく予定である。

#### 参考文献

- 1) (社)日本コンクリート工学協会：マスコンクリートのひび割れ制御指針 2008
- 2) 高岡道雄，馬渡恒明，坂谷益司，望月正孝，益子幸一，伊藤雅彦：長尺ヒートパイプの開発とヒートパイプの応用製品，藤倉電線技報，第68号，pp.50-63，1984
- 3) 神崎浩二，吉本靖俊，樋口晃，村上裕治：マスコンクリート構造物の温度ひび割れ制御，コンクリート工学年次論文集，Vol.28，No.1，pp.1283-1288，2006